慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世政治史(吉村宮男著, 内外圖書株式會社發行)
Sub Title	
Author	高橋, 磌一(Takahashi, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.2 (1936. 7) ,p.192(360)- 193(361)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360700-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現在知られ得る限りの資料と、著者の支那古銅器全般に亙る該博な知識との合成である本書が學界の待望を滿すものであることは今更喋々するまでもあるまい。著者苦心の蒐集になる戰國秦式鏡百四十七面の寫眞若しくは拓影は三十九葉の美しい圖版となつて卷末を飾ると共に、專門外の吾人等に對しても無言の示唆を與へるかの如くである。他に二十八の挿圖と集成圖索引並に佛文梗概が付されてゐる。（菊倍判、本文七十二頁、定價七圓五十錢）

（杉本忠）

近世政治史（吉村宮男著　内外圖書株式會社發行）

今般東大史料編纂官西岡虎之助氏主唱の下に、東大文學部出身の新進學者によつて新日本史叢書全廿五卷が公にせられる事となつた。本叢書は、各時代の經濟、社會、政治、外交、思想、文化の各部門に各專攻の學者をして筆をとらしめ、新考證新體系の下に右せず左せぬ最も學的價値の高い新國史を生み出さんとするもので、本叢書が各執筆者及關係者の努力によつて美事完成し、學界に貢獻せられん事を祈つて止まない。その第一回配本として吉村宮男氏の近世政治史（同叢書第十六卷）が最近公にせられた。

一體政治史は史學の中最も早く發達したものであり、一般に史書と謂へば、多く政治史であつたと謂つて差支へない。しかし乍ら從來の近世政治史は『主として當時に於ける幕府及び諸藩・卽ち支配階級の政治的組織の記述に重點を置き、その際政治形態を常にその社會そのものと關聯せしめつゝ分析批判すべき基本的理解の點に尙ほ不十分であつた』が故に、近時新進學徒の間には既に野心的な政治史の出現が待望する聲がつよかつた。著者は『表面的に政治のみを社會から遊離せしめ、單に諸制度、諸政策を羅列的に記述說明するのではなく、當時の近世的政治形態の特質を本質的に把握し、それらの制度政策の意義を理解する事』を以て、その殘された課題なりとする極めて妥當なる意圖の下に筆をとられた。卽ち吉村氏は、近世中央集權的封建制度下に於ける支配者の最も努力を集中したのが、彼等の社會的、物質的基礎たりし、農村對策及びそれに次いで封建制そのものを動搖せしめる、商品經濟への對策で、その中に近世的政治形態の特質が看取されねばならぬとし、その特質を信長以下の近世的政治支配の中に見出す事に筆を起して、幕政の成立より文治政治の展開、その停頓、及びその崩壞過程を通じて氏の所謂近世政治形態の特質の把握に力められた。その敍述は從來の政治史に未だ見ざる程に社會、經濟史的問題を多く採り上げて、本書の特色となしてゐるが、之を又、近時社會、經濟史方面の研究興隆の一成果とみることができる。勿論他の見地よりすれば、本書の構成そのものに多くの批判が加へらるるであらうが、讀者は尠くとも本書が現在に於ける少壯學徒間の史觀の一つの反映としてとり上ぐべきであらう。

著者は本書の敍述に當つて力めて、最近に於ける研究の成果を攝取された事は敬服の外はないが、更に慾を謂へば、第二章第六節『鎖國の形成』に於いて、鎖國の本質は封建的統一者としての幕府がその封建制維持のため當然なさねばならなかつた商業資本

との鬪爭に存するものであるとし、切支丹傳道禁壓問題は單にその現實的發生の契機となつたに過ぎないとせられた邊り、その切支丹問題に對する豐富な說明に比較しても、先の商業資本との鬪爭に存するとせられた見解に、もつと具體的な說明を求めたく、又第三章『幕府官僚の構成』に於ける記述は本書の他の部分に比し、多く平面的羅列に止り、その特質例へば合議制、月番制等の問題に著者の見解を窺ひ得られなかつたのは殘念である。

幕政の停頓、崩壞過程について著者の敍述方法は極めて滑らかで、特にその時代の事象に對する社會的批判を、多く當時の根本史料、或はインテリ的視角を有する當時の識者の言に求めて、著者は更に客觀的にその論旨の統一を謀るあたり、新進史家の筆として流石とうなづかせるものがあり、又一方その敍述には新進史家のみのもつ熱と意氣とに溢れてゐる。

本書は紙數の都合上、その敍述を天保の改革に止め、それ以後については結語として數頁にそのあらましを記したのみであるのは遺憾である。幕末、維新政治史は實に近世政治史に於ける重大問題として見逃す能はざるものである事は謂ふ迄もなく、又、それを現代政治史の發端にのみ任すべきものでない事は勿論である。もし本書に就いて十分な論述ができないのなら、本叢書中特に維新史の一卷を設けて政海、外交、經濟の各部門に亙つて餘裕ある論述を求めたい。

要之、本書は現在の新進學徒間の空氣を反映するものとして、且又出づべくして出でざりし新體系の近世政治史として、正に重要なる學的貢獻をなすであらう事を信じて疑はない。（高橋磌一）

日本精神生成史論　中世篇（鈴木重雄著　理想社發行）

本書は曩の上代篇に次いで平安時代から鎌倉時代までを取扱つてゐる。

著書に依れば、平安時代人は個體としての自覺は盛んであつたが、之に比例して全一的の方面は弱い傾向を示し、全精神の主な部分が個體面に集中するに至つた。しかもその自覺たるや、多くは自然人としての自覺に止り、小我に執着せしめるものであつたゝめ、社會は物質慾名譽慾等の充足を目的とする利己主義者の活動舞臺となり、斯くして譎詐嫉妬陰謀等の盛行となつた。又一方不安焦燥の生活を營む畸形的精神生活者となり、こゝに迷信が喰ひ入り、祟り物の怪穢れ等が盛に唱へられ、卜占等の方法に依つて事物の原因を探り、神佛への祈願に依つて脅威から免れやうとした。

以上のやうな傾向は平安時代の末期に飽和狀態に達し、鎌倉時代の初期には全體に歸一せんとする萌芽を見、政治形態としては鎌倉幕府となり、文化形態としては淨土宗日蓮宗禪宗等となつた。文の京都武の鎌倉、感情の京都意志の鎌倉が相抗爭し相融合して再び全體的統一的の日本精神を顯現せんとしてゐるといふのである。

著者は斯る見地から平安時代の初期が日本精神の生成上極めて重要なる轉廻期なることを强調するために過去を回顧し前途を展望し時代の概念を明にしてゐる。